

氏 名	おりいほづみ 折井穂積
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 180 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	フランソワ・ラブレー『パンタグリユエル物語 第三の書』におけるクレマン・マロの風刺詩『地獄』の影響

論文調査委員	(主 査) 教 授 廣 田 昌 義	教 授 吉 田 城	助教授 田 口 紀 子
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

フランソワ・ラブレーの『パンタグリユエル物語 第三の書』(1546)は「結婚すべきかどうか」というパニユルジュの悩みを巡って展開し、様々な占いや識者との会見が繰り返される。だがこの問題は最後まで解決しない。それどころか物語は筋と無関係な「草の礼讃」で幕を閉じてしまう。このような特殊性から、この作品は対称的な構造を有しているのではないかと考える研究者が80年代から現れ始めた。確かに借金礼讃とパンタグリユエリヨン草の礼讃は対になっているような印象を与える。結婚制度に関する論議も前半と後半に見られる。また、中央部を挟み、前半部に四つの占い、後半部に四人の学識者の助言が配置されている。中央部にはエピステモンとジャン修道士の助言の間に挟まるような形でヘル・トリッパとの会見が配置されているが、このオカルト学者は確かに予知と学知の要素を併せ持つ。さらに、この説はオカルト学者との会見の最中にパニユルジュが発した「汝自身を知れ」という言葉の意義を見事に説明する。この仮説の提唱者エドウィン・デュヴァルによれば、パニユルジュが探し求める問題の解答は、作品の中心に、しかも彼自身の発した言葉の中に隠されているのだ、という。これは大変に魅力的な仮説ではあるが、その正当性は未だに完全には証明されていない。実際、デュヴァルの図式において対となっている各エピソードには、長さの不均衡なものがある。例えば、二つの長大な「ふぐり」のリストを含むジャン修道士の助言の方が、対となる筈のエピステモンの助言よりも圧倒的に長くなってしまふ。このような不規則性がある以上、デュヴァルの図式は決定的なものとは認められないというのが少なからぬ研究者たちの意見であろう。

そこで論者は一旦ラブレーから離れ、同時代の詩人クレマン・マロの風刺詩『地獄』(1526?)の構造に注目する。それはこの詩が「地獄から天国へ」という図式を利用して書かれており、対称構造を有している可能性が高いと予想されるからだ。論者はこの事実を証明すると共に、マロが構造の特性を利用することによって真の意味を隠そうとしたこと、中心部に地獄の裁判官ラダマンチウスの二枚舌を置くことによって地獄から天国への図式の転回点としたこと、などの事実を明らかにする。

ところで、この地獄の裁判官は『第三の書』の中心の悪魔的オカルト学者を想起させる。さらに彼の二枚舌はパニユルジュの台詞「汝自身を知れ」の特質を思わせる。ここには何らかの影響関係があるのではないか。そこで二作品を比べると、影響は単に構造だけではなく、内容に密接に関わっていることに気づく。例えば、マロの風刺詩の最初の方に配置された地獄の経済論は、ラブレーが借金礼讃を書く際に参考にしたように思われる。また、地獄の経済論と対となっているのは王妃マルグリット・ド・ナヴァールの礼讃であるが、ここでは王妃が花の名前を持つことが利用されている。ラブレーはこれにヒントを得てパンタグリユエル王の名を持つ草、パンタグリユエリヨンの礼讃を書いたのではないか。ラミナグロビスのエピソードでは頻りに魂の地獄落ちについて語られるが、これは『地獄』における「哀れな魂」に対応しているのではないか。これらの事実から、ラブレーがマロの『地獄』を設計図として『第三の書』を組み立てたという解釈が可能となる。そこで論者は、マロの風刺詩の影響を示すと思われる箇所を網羅的に取り上げ、二作品の間に明確な対応関係が見られることを指摘する。

では何故ラブレールはマロの詩を設計図としたのだろうか。マロの詩は「地獄から天国へ」の図式を基に構成されている。するとパニユルジュの「知の探索」もまた「地獄下り」と重ね合わせられていると考えられる。実際、「地獄下り」が隠されていると思われる要素は少なくない。ラミナグロビスのエピソードには悪魔に攫われることへの恐怖に加え、直接「地獄下り」への言及が見られるし、前半部にはそれぞれのエピソードに「地獄下り」を暗示する要素がある。それらは、地獄の番犬に餌を与えるという表現、地獄への入口をも暗示するシビュラの穴、ダタンとアビラムの地獄落ちへの言及、タルタロスを想起させるサトゥルヌス、等だ。これらは全体の構成とは無関係に見えるが、実は地獄下りの図式を暗示するために周到に隠されているのではない。論者はこれらの要素を分析し、この仮説を検証する。

次に、論者は中央部の不規則性について考察する。先に触れた通り、二つの「ふぐり」のリストが中央部の対称性を崩しており、デュヴァルの図式の欠点となっている。ところで、この二つのリストについて荻野安奈は次のような突飛な推測をしている。それは、これらを文字どおり二つの「ふぐり」と見なすことができるのではない、というものだ。この仮説は意外と真実をついているのではないかとすれば、ヘル・トリッパとの会見に相当する対称構造の中心はファロスの視覚化ではないだろうか。ここで論者は『第四の書』の序文(1552)が『第三の書』とほぼ同じ「偏った」対称性を有していることに注目する。同様のテキスト配置は『第三の書』第8章、及びそれと対称的位置にある第47章にも見られる。『第四の書』序文といえ、陽物神プリアポスの台詞が主要部分を占める。第8章は男性器の重要性を述べたものであり、ここでもプリアポスが対称構造の中心に登場する。そこで論者は以上の箇所を分析し、医学者ラブレールがいかに「ふぐり」とファロスの特性をテキストに組み込んでいったかを明らかにする。

さて、『地獄』に対称性があり、さらに『地獄』と『第三の書』の各部が対応している以上、『第三の書』が対称性を有することは自明である。中央部の不規則性は男性器の下層図像の挿入によって説明できるし、その他の殆どの不規則性も『地獄』との対応から説明可能となる。とすると、デュヴァルの図式は決定的なものと考えてよいことになる。だが一方、男性器の下層図像という先の仮説には問題点も残されている。ヘル・トリッパのエピソードにはファロスと言うよりも糞便や肛門のイメージが頻出するからだ。この事実をどのように説明したらよいのだろうか。ここで論者は再び「地獄下り」という下層図式に注目する。パニユルジュは知らないうちに地獄に下り、オカルト学者との会見で地獄の底タルタロスに至る。一方、この会見のテキスト配置はファロスを視覚的に体现している。この二つの要素を一緒に考慮することによって、新たな仮説を立てることが可能となる。それは、比喩的な意味においてパニユルジュは悪魔と交わってしまうのではないかと、いうものだ。本論では二種類の自己愛(「他人への愛の欠如」と「神への愛の欠如」と二種類の好奇心(「他人の領域への好奇心」と「神の領域への好奇心」)、そして悪魔の二つの姿(「誹謗者」と「誘惑者」)に着目する。パニユルジュは好奇心に胸を躍らせて「知の探索」を開始する。その好奇心は自己愛に支配されているため、ある時は不敬にも神の領域に向かい、彼は予知やオカルト科学に関心を抱く。またある時は他人事へと向かい、彼は誹謗者となる。こうして彼は全く気づかぬうちに悪魔と関係を持ってしまうのだ。ラブレールは「知の探索」の中央部に悪魔との性交という下層映像を配置することによって、自己愛に導かれた好奇心の危険を指摘しようとしたのではない。

この自己愛と好奇心の問題をさらに詳しく探るため、論者は女性蔑視表現の機能を分析する。例えばパニユルジュの女性蔑視的態度には彼自身の問題が隠されていると考えられる。さらに他の登場人物の台詞の女性批判についても同様のことが言えるのではないかと。とりわけ問題となるのは医学者ロンディビリスの子宮動物説だ。論者はこのエピソードを分析し、そこに見られる子宮の特質が、ある時は男性器、ある時は胃袋の特質と重複していることを指摘し、ロンディビリスの女性批判の中にもパニユルジュの自己愛と好奇心の問題が隠されていることを明らかにする。結局、女性蔑視表現の裏側にはパニユルジュの地獄下りや悪魔との性交さえもが暗示されている。とすれば、『第三の書』の女性に対する誹謗は「魔女狩り」という歴史的な文脈とも密接に結びついていることになる。

次に、サトゥルヌスとユピテルの相克の構図が如何にパニユルジュの問題と関わってくるのかについて、論者は考察を進める。サトゥルヌスは、黄金時代の統治者としての肯定的イメージと、父ウラノスの陰部を切り取り息子たちを食べてしまう、という否定的イメージを持ち合わせており、ラブレールはこの二面を巧妙に利用している。さらに注目すべき点は、彼がこの異教の神にサタンの姿を重ね合わせていることだ。そもそも、オカルト学者や魔女たちを支配する遊星の神として、サトゥルヌスはサタンのイメージと重なる。しかもサトゥルヌスはユピテルに敗れタルタロスに幽閉される。従ってパニユル

ジュの地獄下りにサトゥルヌスが登場するのは偶然ではない。それどころかラブレーは積極的にサトゥルヌスを前面に出すことによって、その裏側にサタンを隠し込んでいる。また、『第三の書』にはユビテルに刃向かう巨人族のイメージがしばしば見られるが、これは神の領域の知への不遜な好奇心を異教の神話の図式を借りて表したものである、と捉えることができよう。

最後に、論者はパンタグリュエリヨン草の礼讃の解明に挑む。ラブレーは『地獄』のマルグリット・ド・ナヴァール礼讃とそれに続くキリストによる救いへの希望を叙述した箇所を基にして草の礼讃を創造した。ここでもマロの詩句が謎の解明の鍵となる。ところで、この草の効用に関しては二つの否定的な記述がある。一つは、この草が首吊紐として役立つという記述であり、二つ目は、この草を加工して帆を発明した人間たちは、いつか天空に昇り神々の座を脅かすであろう、という記述だ。論者は、まず、この草の礼讃が「知」の礼讃であることを示した上で、何故ラブレーがこのような否定的側面を草の礼讃に含めたのかを考える。『地獄』において、マロは神に引かれるマルグリットを「琥珀に引かれる藁」に譬えている。ラブレーはそこから「麻」の礼讃を書くことを思い付いた。そして藁と琥珀の共感関係からパンタグリュエリヨン草の持つ反発関係と共感関係を発想し、それを礼讃に織り込んでいった。これが草の効用に見られる二つの否定的側面の記述となったのだ。論者はこの仮説を先へと進め、この草の礼讃に「知」と「知」を貶める二つの好奇心（即ち「神の領域への好奇心」と「他人の領域への好奇心」）が図式化されていることを示す。さて、パンタグリュエリヨン草の礼讃の後には不燃パンタグリュエリヨン草の礼讃が置かれている。ラブレーはここで真の「知」について描こうとした。「知」が健全であるためには「愛」に導かれなければならない。これこそ不燃草が象徴するものなのだ。論者はマロの詩、聖書の記述、序文に示されているパンタグリュエリスムの定義などを参照することにより、ラブレーが理想とする「知のあり方」を明らかにする。

結局、ラブレーはマロの詩の対称構造と主題を利用することによってパニユルジュの「知の探索」を創造し、そこに「知」を巡る諸問題を図式化したのである。このような特異な創作手法が明らかとなった以上、ラブレーの作品の解釈や整合性の有無などに関するこれまでの常識は、今後、再検討されるべきであろう。

論文審査の結果の要旨

フランス・ルネサンス期を代表する作家フランソワ・ラブレー（1494? - 1553?）の『ガルガンチュワとパンタグリュエルの物語』については、1980年代からそのテキスト構成の形態的特性に関心が向けられるようになった。とりわけ、古典古代（ウェルギリウス）、中世（ダンテ）、ルネサンス期（モーリス・セーヴ）の文学テキストがもつ対称構造が、ラブレーにおいてもみとめられ、それが作品解釈の重要な鍵になるとする論考が、フランソワ・リゴロ、エドウィン・デュヴァルなどのフランス16世紀文学の代表的研究者によって発表された。本論文は、このようなラブレー研究の潮流に添いつつ、次の三つの新しい知見を提示している。

第一に、ラブレーと同時代人で、文学的にも思想的にも近い関係にあった、宮廷詩人クレマン・マロ（1496-1544）の長編風刺詩『地獄』のテキストに対称構造があること、第二に、ラブレーはマロのこの作品の構造を基にして、『パンタグリュエルの物語 第三の書』のテキストを組み立てたと考えられること、第三に、この対称構造を手がかりにしてラブレーのテキストを分析すると、『パンタグリュエルの物語 第三の書』の中心的登場人物のパニユルジュの性格と、同書の末尾に現れるパンタグリュエリヨン草の記述がもつ意味とが明らかにされること。

*

I. クレマン・マロは、肉食を禁じられる四旬節に脂肉を食べたとして1526年2月に逮捕され、シャトレの監獄に監禁されて異端の疑いによる尋問を受け、ついでシャルトルの牢獄に移されて5月まで幽閉される。この幽閉期間に執筆されたと推定されている『地獄』は、マロ自身が主人公であり、地獄において審問官ラダマンチュスの尋問を受ける場面を中心部とする、不当な迫害に対する抗議と弁明の書である。ウェルギリウス『アエネイス』、ダンテ『神曲』、ジャン・ルメール・ド・ベルジュ『緑の恋人の書簡詩』などに見られる、「地獄下り」を図式とする作品であることは明らかであるが、論者は488行からなるこの長編詩が、冒頭から順次、38行の「語り」、173行の「地獄の使いの説明」、30行の「語り」、23行の「ラダマンチュスの尋問」、43行の「語り」、145行の「被告マロの弁明」、36行の「語り」となっていることから、「ラダマンチュスの尋問」を中心とする対称構造になっていることに注目する。そして、マロの他の作品、『フロリモン・ロベルテの哀悼詩』、

『サンブランセのエピグラム』、聖書「詩編」の翻訳の序文「フランスの貴婦人たちへ」、『マグロンヌの書簡詩』が同様の構造を有していることを指摘して、マロが対称構造によるテキスト形成に特別な関心を抱いていたと推測する。次いで、テキストの細部においてもいくつもの対称構造を発見し、その結果、かけ隔たれた箇所に見える語や句の間に対応関係があることを明らかにする。特に興味深いのは、これらの対応関係が隠されたメッセージを示すと考える点である。その一例を挙げるならば、『地獄』の122行目から始まる64行の詩句は、「地獄の使いの説明」の部分に含まれるが、そこでは、多くの蛇の名前が列挙されてそれらの蛇全体の名前として「プロセ（訴訟）」という固有名詞が示され、次いでヒドラとヘラクレスの闘いが語られる。これに対して、「被告マロの弁明」の部分に含まれる308行目から366行目においては、ギリシャ神話の神々の名前の列挙の後にクレマンというマロの名前が現れ、次いでルターと教皇の対立についての言及がある。この二つの箇所の構造的平行性は明白だが、それに加えて後者の部分が終わる366行目は、この長編詩の最後の488行目から数えて122行目に当るのであるから、詩全体の中での配置としては前者の部分に対して完全な鏡像的対称関係におかれていることがわかる。論者は、分析をなお一歩進めて、〈ヒドラとヘラクレスの闘い〉と〈ルターと教皇の闘い〉とが同様の関係性をもって配置されていると考えるならば、ヒドラは当時の教皇クレメンス7世に、ヘラクレスはルターに、それぞれ対応するとし、その解釈の妥当性の根拠となるさまざまな傍証を挙げる。こうして、テキストの対称構造が改革派の信仰をもつマロのメッセージを意図的に隠しているのだと結論する。

Ⅱ. フランソワ・ラブレーが、マロの作品に見られる対称構造とその機能とを継承して、『パンタグリユエル 第三の書』のテキストを形成したこと、したがって同書の読解のためには対称構造型への注意と、その構造が隠れているものの解説の作業とが要求されること、これが本論文の第二の論点である。論者はまず、『地獄』と『パンタグリユエル 第三の書』との構造的対応関係を、両作品の記述の順序にしたがって、冒頭部の〈ミノスによる冥府の統治〉（『地獄』）と〈パニユルジュによるサルミゴンダンの統治〉（『第三の書』）からはじまり、最終部の〈冥府からの解放者キリスト〉（『地獄』）と〈不燃パンタリユエリオン草の礼賛〉（『第三の書』）に至るまでの19箇所を指摘する。その上で、『第三の書』に頻繁に現れる、悪魔と地獄についてのさまざまな形での言及が、ヘラクレス、オデュッセウス、アエネアスの地獄下りを指示していることを、厳密な源泉研究を通して明らかにする。その結果、〈結婚は是非か〉の難問を解決するために、パニユルジュがいくつもの種類の占い（その第一が、ホメロスとウェルギリウスのページ占い）を試み、予知能力をもつとされるさまざまな人物の意見を求め、そして『第三の書』の中央部にあたる、第25章で、オカルト学の大家ヘル・トリッパに教えを請うに至るという一連の過程は、パニユルジュの〈地獄下り〉であるという解釈が可能となる。この解釈に従えば、ヘル・トリッパはオカルト学者の姿をした大悪魔であり、彼の鎮座する場所は、地獄の奥底タルタロスだということになる。事実、ラブレーはヘル・トリッパを「悪魔の魔法使い」、「反キリストの手品師」、その居場所を「悪魔の巣窟」と呼んでいる。このように見るならば、マロの『地獄』がその中央部にタルタロスに鎮座する地獄の審問官ラダマンチュスを置いたことに倣って、ラブレーは『第三の書』の中央部にオカルト学者ヘル・トリッパを置いたと考えることができるのであり、そこに両作品の間の影響関係の端的な現れがあると論者は主張する。

Ⅲ. 『パンタグリユエル 第三の書』の主題は、パニユルジュが結婚すべきか否かの判断を行なうために必要な〈知の探究〉にあることは明らかであるが、上に述べたようにこの書の構造がマロの『地獄』の構造をそのまま取り入れたものであるとするならば、その構造からパニユルジュが求めている〈知〉がもつ隠された特徴が明らかになる。それは迷妄的な〈知〉である。そして、そのような〈知〉をパニユルジュに求めさせているのは、彼の好奇心であり、その好奇心の根底には自己愛があることを、論者はテキストの細部にわたる綿密な分析に基づいて主張する。この自己愛と節度を知らない好奇心とから、パニユルジュは〈知〉を求めつつ、迷信、妖術、魔術、悪魔の世界へと迷い込んでいくのであって、それらの迷妄的・悪魔的な〈知〉に対する批判的言辞を吐きながらも、実はそれに惹きつけられ、ヘル・トリッパの姿を取った悪魔と合体すらしているのだと論者は述べる。パニユルジュのもつこのような負の特性の強調は、『第三の書』全体の解釈に関わり、従来ラブレーの合理主義的進歩思想の発現と見られてきた箇所のほとんど全てに、人間の思い上がりや自己愛を基にした不遜な好奇心に対するラブレーの批判が隠されていることが、本論によって明らかにされる。その一例が、『第三の書』を締め括っている、パンタグリユエリオン草の記述についての論者の解釈である。従来、自然に対する人間の支配力の進歩を比喩的に表現しているとされてきたパンタグリユエリオン草について、それが船の帆布として使われることによって、人

間たちに地球上のあらゆる場所への移動を可能にするのみならず、いずれは天上界にまで進出する可能性をも開くという記述に、論者は人間の《知》の節度を越えた拡張が、禁じられた領域にまで及ぶことへの警告を見る。

＊

ラブレー解釈の最近の問題設定を基にして、ギリシャ・ローマ神話、聖書、中世からルネサンス期にかけての文学作品を博覧しつつ、『パンタグリュエル 第三の書』についての新しい知見と解釈を提示する本論文は、その質量ともに圧倒的な印象を与える。立論のいくつかの箇所に強引さが見られること、ラブレーの近代性が無視されている感を与えることなどの欠点がないわけではない。しかしそれは、本論文の本質的価値を損なうものではなく、むしろ今後の研究の深化を期待させるものである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2001年1月23日、調査委員3名が論文内容と、それに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。